

『源氏物語』の仏教

——「御法」巻の出家觀をめぐって——

高橋 文二

(一)

『更級日記』と仏教」と題して平安朝の女流文学の表現世界の中の仏教の意味あいについて私が問い尋ねたのは「佛教文学研究」の創刊号（平成十年三月刊）においてであった。『更級日記』の中に仏教に関連する事柄を探そうとすれば、『法華経』関連の記事をはじめ、薬師仏や阿弥陀仏への言及、石山寺や長谷寺や清水寺などへの参詣、参籠等々多くの関連記事が見られることは言うまでもない。しかし、平安朝の女流文学の諸作品の中にそういう記事を探り、採りあげてみてもそのことによつて何が見えてくるのかということになると、風俗や習慣的な儀礼や信仰のきわめて外面的な紹介に止り、それを超えて女流文学の内実が見えてくるわけではない。仏教というものが女流文学の表現世界に関わつて存在しているということを確かめるためには、女流作者たちの心のありようを、できるだけその内実に向つて考えてみる、ということがまず第一に必要なことであろう。女流作者たちが、多くは心の苦渋、苦悶に関わつて、あるいは自己救済に関わつて仏教を必要としたということは、『更級日記』や『紫式部

『日記』などの記述に明らかであるし、『源氏物語』のような虚構の物語作品の登場人物たちの心境に即しても明らかなことである。そういった心境を棄て置いて仏教を云々しても、少くとも女流文学の表現世界の仏教の問題にはなりにくいのではないかと私は考えている。また仏教上の史実や論書や経典を引いて女流文学の行文、文脈を追い、論じるといった私などにも親しい方法をとった場合でも、仏教的な理念や観念を先立てていくということになると、作者の屈折の多い、細やかな心の動きや感性の働きは封殺されて、作者の意向とはずいぶん違ふところで、ものと言うというふうになりがちである。とりわけ自然の風物に関わつてもを言う場合には、女流作者たちの心のうちに自己救済に関わる宗教観や美意識が既にして豊かに育つていてという状況があるので、十分に注意しなければならぬ。先の『更級日記』の論稿の中では、その後半の部分において、とくに月影の問題に関連して、仏教的な観念を先立てることへの疑問を述べた。

今回の小稿では『源氏物語』の表現世界に表れた仏教の問題について考えるが、今述べたようにここでの方法も、まずはこの物語の具体的な行文を追つて、そこに表現されている登場人物たちの心理、情感に即して仏教への思いを確認してみようというところにある。問題の拡散を避けるためにここでは光源氏と紫の上の晩年の心のありようを主な対象として仏教の問題を考えてみたい。

まずは「御法」巻の巻頭を採りあげ、光源氏と紫の上の心理、心境の上に表れた仏教の意義を問うてみる。

知られるように「御法」巻には紫の上の最晩年の心境と、仏事の営みと、やがて訪れたその死と、それらのありように深く関わる光源氏の、これもまた最晩年の心境が克明に語られている。とりわけ巻頭の、病久しく、ひたすら出家を願う紫の上の心境と、光源氏の、病身のまま出家しようとする紫の上の生活上の不安と危惧とを思つて、つまりは出家を許さないその心境とを細述する条は、二人の心の行き場を示唆する、王朝女流文学的な表現の場で

はないかと私は考えている。その意味あいを探ることは仏教というものが『源氏物語』という表現世界の中で、どのような意味をもっていたかを考えさせてくれるのではないかと思う。

巻頭、紫の上の病が既に久しくなっていることから語り出される。回復のきざしもなく、日ごとに弱々しげになっていく紫の上を見て、院の、つまり光源氏の嘆きはこの上なく深い。その嘆きぶりを見て紫の上は、自分が先に逝ったならば、院は、それこそどんなに悲しまれることであろうかと、出家を思いつつもまずは光源氏の悲しみを思い遣って胸を痛めるのである。

そもそも出家とは、生きながら浮き世の義理や人情を断つことであり、もちろん妻夫めおとこの関係を断つことは当然の前提であるはずなのだが、ともに時間を過ぎてきた相手を棄てることは、相手の心情を思うと堪え難いというのである。死を真近にし、出家を覚悟している紫の上にあつても相手の心を思い遣ることを止めないのである。このあたりの心情は仏教者の覚悟や判断とは大きく異なっている。迷いであり、執着であり、この物語風のもの言いをするれば、愛執の思いでもあるのだが、この物語は光源氏と紫の上の最晩年の、ともに出家への思いを深めているはずの両人の心境を語るにあたって、まずはそれら愛執の思いを語ることから始めているのである。始めているという言い方をしたが、もちろん、この物語は、終末にあつてもこの妄執や迷いを排除して、出家を成就させ、悟りを得るという方向に進むわけではない。妄執は妄執のままに留るといふのがこの物語の終り方なのである。

紫の上自身は、この世にはもはや望むこともなく、気にかかる絆ほだこもない身であるから、これ以上無理に生き長らえたいとも思われないのだが、と思いつつ、しかし、先にも触れたように長年ともに過した二人の関係を自分が出家して棄ててしまうということになれば、そのことがどんなにか院の心を嘆かせることになるであろうかと、心中深く悲しまれた、と本文には、その経緯が細かに記されている。右の終りの部分は原文では

あながちにかげとどめまほしき御命とも思おもされぬを、年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心こころの中にもものあはれに思おもされける。

とある（引用の本文は「新編日本古典文学全集」本による。第四卷四九三頁。以下四—四九三のように記す）。積み重ねてきた二人の時間をこの期に及んで棄てるわけにはいかない。棄て去ることによって生じる哀しみは堪え難いものであるという思いであり、そのことを「人知れぬ御心のうちにもものあはれに思おもされける」と記すのである。「ものあはれ」の心境が出家への思いを押し遣つてしまふという結果になつてゐるのである。と言つて、この心境はもとよりここではじめて生じたものではない。そういう心境は出家への思いと並行して光源氏や紫の上の時空を彩つていたと言つてよい。さらに言えば、こういう「ものあはれ」的心境に屈折していくところに王朝の女流文学的表現があると言つてもよい。

一方の光源氏も、数々の仏事を営み、憂き世からの離脱の思いを深めてゐる紫の上の出家を、その思いに共感しつつも許そうとしない。と言つて出家を引き止めようとすることは、紫の上に出家をされたら、とり残された自分が困るのではないか、という自分本意の生活上の配慮から出ているわけではないのである。本文を少しく注意して読めば判るように、光源氏その思いは、重く病んでゐる紫の上の生計を思い遣つての引き止めなのである。この光源氏の思いの中にも先の紫の上の心境に響きあふ「ものあはれ」の情感があると言つてよいであらう。

少し後のところには光源氏の心境に即して「たび家を出でたまひなば」——つまり、いったん出家をしたならば、かりそめにもこの世をふり返ることはすまい、あの世では一つ蓮華の座を分かちあおうと契りあつてゐる仲ではあるが、この世にあつて出家したならば、離れ離れに住む覚悟はどうにできているのだ、と語られてゐる。

続いて、さらにそういう心境ではあるのだが、先もおぼつかない状況で病臥してゐる紫の上のことを思うと、い

ざ出家をしようとしても、気にかかつて、どうしても見棄て難いであろう。そんなことをすれば、山水の清い所での出家生活も心乱され、道心も濁つてしまふ——「なかなか山水の住み処か濁りぬべく」（四—四九四）と、光源氏も思うのである。「御法」巻の巻頭には、出家を覚悟しているはずの兩人の、悶々として行きつもどりつする心が語られているのである。

右の行文の最後のところには、こういう光源氏の心ゆえに紫の上は出家を引き止められ、それゆえに光源氏のことを「恨めしく思ひ」申しあげたと記され、さらにこうなるのはつまりは自分の「罪軽かろまじき」ゆえ——罪障の深きためなのだと思つた、と語られてもいる。仏教的な通念へのそれなりの思い、拘りであろうと思われるが、そう思うに至つた光源氏の自分への思いを否定して、出家という行為を選ぼうとはしないのである。

「御法」巻からは離れるが、光源氏、紫の上の死後の物語である「宇治十帖」の「浮舟」巻の浮舟は、薰、匂宮兩人との關係に懊惱して入水という行為を選び、「手習」巻にあつては敢然と出家をする。浮舟の行為は、兩人の心への配慮がもちろん前提にはあるが、懊惱は二方向に分断され、つまりは三角關係という關係の破棄を目的とした行為となつていくのであつて、「御法」巻の兩人の、相手の身と心の痛みへの一身同体的な深い共鳴、同情とは明らかに趣きを異にしている。光源氏と紫の上兩人にあつては、共有あしてきた時間の重さが、浮舟たちの關係におけるそれとは明らかに違ふのである。

小稿は、そういう時間について論及する場ではないので、少しく触れるに止めるが、「御法」巻より四年ほど前、光源氏は兄の朱雀院の五十の賀の宴を計画し、それに先立ち、六条院の女人たちを集えて女樂を催したことがあつた（若菜 下「巻、四—一八五」）。その宴が果てたあと、光源氏は紫の上と語り、わが半生を述懐する（四—二〇四）。そこには光源氏たちの感受していた時間がどういふものであつたのかが示唆的に語られている。話題の初めは

六条院に降嫁した女三宮に琴かみを教えたということであるが、それに関連して、あなた、つまり紫の上に対してはそういう指導の時間をあまりもち得なかつたが、にもかかわらずあなたの和琴わごんはすばらしく、自分の面目も立つた、などと語り、さらに何もかも備つて、世にも無類のあなたのような方は長生きできぬという例もあるようだからと、女人の重厄の三十七歳に至つてゐることを踏まえて、光源氏は語り続ける。追つてみずからの半生に言及する。自分は類まれな、人に異なるさままでこの世に生れ出たが、その反面、世にまたとない悲しい目に会うべく生れてきたようにも思われる。大事に扱つてくれた人々には早くに死別し、年を重ねた今に至つても意に満たず、悲しいことが多く、またあつてはならぬ体験もして過してきたので、その辛さゆえにかえつて予想外の長生きもしてきたのだ、と語る。栄華も憂愁も類ない半生であり、とりわけ悲しい体験を重ねたがゆえに今日があるのだという言い方をする。

この世ならぬ人である光源氏が憂愁の境涯を云々することは一見奇異な感じもするが、こういう言い方を光源氏は「御法」や「幻」という終末の巻々にあつてもしている。この世ならぬ栄華や類まれな才能、美貌という光源氏の二面は、憂愁の自覚という半面と相俟つて光源氏という人間を構成している。この憂愁の半面が光源氏の現実性を際立せる。時間と先に言ったことはこの憂愁の体感と深く結びついている。

しかし、この折の光源氏の眼差しには少しく配慮に欠けたものがあり、紫の上の本性を捉えていない面もある。後々の紫の上の病を機に光源氏の眼差しは大きく変つていくが、この段階ではいまだ自己本位のところがあるのである。時間の濃度が紫の上に比して少しく稀薄なのである。それは先の述懐に続いて記されている紫の上を評するところに表れる。

光源氏は紫の上に対して、自分が須磨・明石の浦へと流離してしばらく別離の生活を送つたあの時期を除けば、

さほどもの思いの種になるような苦しみはなかったのではないか、世には後のような高い身分の人であつても苦しみの種は尽きないものだ、親もとでゆるり育てられたようなあなたの苦勞のなさは比べようもありますまい、と言う。さらに、思いのほかに女三宮を迎え入れたことはおもしろくないことかもしれないが、私のあなたへの思いは、お気づきにならないことかもしれないが、一層深くなっているのだから、そのことは判つていてくれると思う、と言ひ足すのである。

光源氏のこの長々しい言いように対して、紫の上は何と言つたか。光源氏の思いとは違つた、ともに生きてきたことゆえの、つらさ、悲しみを踏まえたもの言ひを紫の上はするのである（四―二〇六）。

おつしやるように分に過ぎた幸せな身の上のように世間の目には見えるかもしれないが、心には堪えきれない、何か嘆かわしいことばかりがついてまわつて、つまりはそのことが生きていくことの祈りのようになっていた、と紫の上は応じるのである。後半は原文には、

心にとへぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける。

とある。「祈り」とは解するに難しい言い方であるが、つまりは光源氏の、さらには世間の見る目とは違つて、私の半生にも私なりの深い嘆かわしさや悲しみがあつたのであり、それを拒むことができないのが私の半生である以上、その半生を祈るような気持で引き受けているのだ、と言つているのだと思う。この直後、紫の上はさらに、余命いくばくもないと感じられる今、出家をお許し下さいと言つのである。

おのれの憂愁を吐露した光源氏は、しかし、この段階では紫の上の憂愁を洞察することができなかった。紫の上の憂愁は深く、まさにそのことが起因して、その後ほとんどなくして紫の上は発病する（四―二二二）。ここが大事なところだと思つが、二人の時間は紫の上のこの病を契機に接近し、深く絡み合い、響きあい、悲しみを軸に二つの時

間のようになつて躍動し始める。光源氏と女三宮との間に身と心の空隙が生れたことの少しあとに柏木と女三宮の密会が生じる（四―三三）のはごく自然の成り行きである。

憂愁の二つの時間の共鳴、合体がこの物語の、また光源氏というこの世ならぬ特性をもつた存在の、現実化を促し、現実性を生み出していることは言うまでもない。

再び「御法」巻にもどつてものを言つと、この巻頭の、光源氏と紫の上の心の絡み、響きあいには「若菜」巻以降の二人の時間の累積が深く関わつていたのであり、その経緯を除外した形で、この巻頭の二人の心の煩悶を問うことはできないのである。

(二)

二つの憂愁の心の響きあいというものが「御法」巻の巻頭にあつては「出家」という行為への決断を押し遣つている。といつて、憂愁の心の響きあいというものが仏教的な世界から離れた事柄なのかということになると、もちろん、そうではないであろう。なぜならば、心のありようというものは、とりわけ苦悩にみちた心のありようというものは仏教的な世界を考えていく前提として、当然のことながら、いつも意識されていなければならないものだからである。主に平安朝の女流文学の表現に関わることではあるが、例えば神に対したとき、人は人間同士の心が絡みあつて生み出す罪業についてとやかく言つて訴えるということとは、もちろん、ないわけではないが、まことに少い。むしろ神に対するとき、神の領分を侵したり、汚したりしてはならぬ、神の怒りにあつてはならぬ、といったような形で、禁忌を守り、崇りを畏れることが主流であり、それは人と人との関係の生み出すことを問題にする時空間ではなく、

人と神との関係を軸にする、そしてそれが深く意識される時空間なのだと思う。

そのことに対して、仏の世界で強く意識され、問題になることは人と仏との直接的な関係というよりも、人と人との関係が生み出す罪業といったものが主要な問題となり、その罪業の消滅を願ったときに、仏の世界が際立つてくるのだと思う。もちろん、卑少な存在を越えた大きなもの、宗教的なものとして神も仏もある以上、二つの世界は深く響きあつて人に対峙し、また人を包むものとして心のうちに現前する。それゆえ神と仏の世界を心理的に明確に区分することはできず、しばしば重なってくることもあるが、おおよその傾向として右のようなことが言えるのではないかと思う。

今、ここで思い浮かぶことは伊勢の齋宮の杜に六年余過したかつての東宮妃、六条御息所が、帰京し、病を深めたときに出家をした、といった事態である。御息所は何を理由として出家したのか。罪業意識とでも称すべきものが、その意識の根底にあつたのではないかと私は考えている。

巻で言う十四番目の「滯標」巻の後半に御代替りにともなう六条御息所の伊勢からの帰京と、病と、ほどない死とが語られているが、死に先立つて御息所は出家をする。

ものさびしきやうなれど、心やれるさまにて経たまふほどに、にはかに重くわづらひたまひて、ものいとし心細く思されければ、罪深き所に年経つるもいみじう思して、おま尻になりたまひぬ。

と原文(二一三〇九)にはある。伊勢の齋宮となった娘の離京とともに京を離れて僻遠の地で六年余過した御息所が、御代替にともなつて娘と帰京したわけであるが、娘とともに過した神を祀る場である齋宮の杜を指して「罪深き所」と称している。その称し方は一見奇異にも聞えるが、諸注は、仏教に救いを求めている現況を重く感受して、仏教を忌む齋宮という場所にいたことをそう評しているのだと解している。一応はそう解していいのだろうと私も思うが、

少しく判りかねるのは六条御息所のように皇室関係の方が、しかも娘が神々の信仰の中枢である伊勢の齋宮として神々に仕えている方が、そうしておそらくは幼少時代からこの国の神々への信仰に深く関わり、神事に慣れ親しんでいた方が、なにゆえにその信仰の中枢を指して「罪深き所」などと言うのか、仏教信仰が宮廷周辺にあつて日常的になつていたにせよ、不可解とまでは言わなくとも、奇異なことと思われる。

もとよりここで、宮廷の神事・行事に関わつて実証的に何か言おうとしているわけではない。『源氏物語』の表現自体の中に「罪深き所」という認識を生み出すに至つた事由があるのではないか、それを考えてみよう、と思つたわけなのである。

そもそも御息所は、光源氏の正妻葵の上に生霊となつて取りつき、葵の上を取り殺してしまつたということがあつて、京を離れざるを得なかつた方である。光源氏をめぐる男女関係に深く苦しみ、京を離れざるを得なかつた人である。ただ仏教を忌む神々の境界に六年余も住まつたためにそこが「罪深き所」と称されたわけではないであらう。後々、死霊となつて顕れ、例えば紫の上を危篤に陥れ、死霊みずからが光源氏に妄執ゆえに成仏し得ずに苦しんでいることを訴え、おのが罪障の軽減されるべく供養を依頼したりしているのは（「若菜下」巻 四二二・三六〇）、ものけの言いようであるとは言え、またそのあとに娘の齋宮時代の罪障の軽減のための供養をも願つていて、齋宮という場所の罪深きことがそこに語られているようでもあるが、内実は場所そのものの問題ではなく、妄執の深きゆえに成仏し得ずに苦しんでいること（原文には「心の執なむとまるものなりける」とある。）を訴え、その軽減のための供養を頼んでいるのであり、つまりは御息所自身の深い罪業意識が表白されているのである。

御息所は六年余の齋宮の杜の中の生活を通して少しも慰んでいないのである。神は御息所の心の浄化や慰藉に関わつていない印象なのである。

齋宮の住まう伊勢の地はどういうところであつたのであろうか。深い森、都を遠く離れた地、崇りを畏れながら神事に勤める生活——都の生活に慣れた母と娘にあつて、森を渡る風の音を聞くだけでも寂しく、夜の深い闇は暗い畏れを抱かせるに充分だつたであらう。

都での人間関係は御息所を深く傷つけていた。その経緯の中で増殖した罪業意識の疼きは日がな一日、御息所の心を苦しめていたであらう。その神の杜の中で御息所の心が安らいでいたとは考えにくい。暗い意識は一層増殖するものとしてそこにあつたと言つてよい。

自然の和やかな風物がしばしば人の苦しむ心を慰藉し、波立ちを鎮静させ、浄化へと誘つていく、ということについては「風景論」の視座から私は既に何度も問い尋ね、論じてもきたが、もちろん、人の心に慰藉も安らぎも与えない自然というものも存在している。「宇治十帖」の中で語られている荒々しい川音などはそういうものの典型であつた。その場合、自然の側が人間の心を拒んでいた、と言つてよいだろう。しかし、御息所の場合にあつては、彼女の暗い心が、罪業意識といつたものが、自然を拒み、自然を受け入れるということをしなかつたと言つてよい。心に慰藉や安らぎを得ることなく、御息所は帰京したのである。そのことが伊勢の齋宮の地を「罪深き所」と意識させたのではないかと私は考える。

神々の力は、神の杜の豊かさは、御息所の暗い心を少しも慰め得なかつた。そのとき、はじめて仏教というものが意識されるのではないかと思う。罪業意識を解除させるものとして仏教が登場してくるのではないかと思う。

先々の「御法」巻の光源氏と紫の上の心のありようは「ものあはれ」という共感を中核として「出家」を志向する世界に拮抗していた。二人の身と心が体感してきた時間は深く響きあい、出家という形での分断を受け入れられようとはしなかつたのである。「ものあはれ」の世界が、つまり哀しみ、痛みに共感する世界が、出家という非情な仏事

の世界を拒んだのである。

御息所の場合は、その哀しみ、痛みに手を指しのべてくれる相手がない。手を指しのべてくれる人の来訪を待つて、森を渡る風の音に耳傾け、葉叢のさやぎ、輝きに心をときめかすことがない。伊勢の自然は安らぎの対象として存在していないのである。都の生活や人間関係の中で生れた哀しみや苦しみや痛みは伊勢の地にあつても持続して存在し、というよりもさらに増殖する形で存在し、神の杜もそれを癒してはくれないのである。そういう状態のまま、御息所は帰京する。ほどなくして病臥するということもごく自然の成り行きである。齋宮の地が「罪深き所」として反芻されるのも止むを得ない。この暗い反芻、その中軸をなす罪業意識——そういうものに真当に向きあつてくれるものがまさに仏教であつたのだと思つ。

もちろん、当時の仏教は女人に対して寛容ではない。御息所の苦悩が仏教によつて救済されるというよりも、むしろ仏教によつて罪業意識が一層強調されるといふのが実情であつたのではないかと思つ。そういう煩悶を越える形で、出家がなされた。出家は御息所に慰藉や救済をもたらすことがあつたのであろうか。そのことについては否定的に考えざるを得ない。御息所が後々死霊となつて頭れるということによつてもそう考えざるを得ないであらう。

(三)

仏教というものに対して『源氏物語』の登場人物がどういふ姿勢・態度をとつたか、その典型的な事例を二つ取りあげてみた。一つは光源氏、紫の上の晩年における、出家よりも「ものあはれ」の心情を優先するというありかた、

もう一つは六条御息所の罪業意識に応ずる形で現れた、慰藉や癒しとは関わらない仏教のありかたであった。『源氏物語』がいかにも平安女流文学的な表現手法で創りあげた独自の世界はもちろん前者であった。

後者にあつては御息所の心の救済は、言うならば仏教の側に預けられた形であつたが、前者にあつては、二人の心の救済は「ものあはれ」的な情感の交わしあいのうちに自ずと醸成されるものであり、仏教の側から見たときにそれが迷妄であり、執であつたとしても、その迷いの側に、言うならば賭けようというありかたであつた。

こういう「御法」巻の巻頭に描かれた表現世界は、仏教的な落着に抗するものではあつても、心の慰藉と救済に関わる、きわめて宗教的な表現世界であつたのではないかと私は考えている。

このことは別稿で何度か言及したことであるが、「御法」巻に続く「幻」巻のありようを考えてみると、一層はつきりする。「御法」巻の後半で、紫の上は生前の出家を果たさないまま逝去する。「幻」巻は、紫の上の死後の物語であり、全篇すべて紫の上の思い出の巻である。しかもこの巻は、光源氏登場の最後の巻であり、直接に描かれることはないが、この巻のあと、光源氏はほどなくして出家し、亡くなったことになっている。『源氏物語』の主軸をなしていた男女の絡みあいの人間劇は姿を消し、生前の紫の上の思い出だけが、整然と整えられた春・夏・秋・冬の季節の枠組に守られ、また亡き人への痛恨、愛惜の思いは多くの歌によつて彩られ、まさに全篇がきわめて美的な紫の上への鎮魂歌となつて表れていると言つてよいのである。「御法」巻の巻頭の「ものあはれ」の情感は一層強調された、しかも整然と整えられた形で、この「幻」巻の中に実現しているのである。

先にも触れたように、後々の巻の中で光源氏の出家と死が語られている。伝聞的に語られてはいるが、描写としてはない。この物語の本質は、説話的な伝聞にはなく、心情やそれに響きあう風物の細やかな描写に表れていると私は考えており、それゆえ後に光源氏の出家や死が語られてはいるが、それは説話的伝聞を出す、物語としての光

源氏の本質的な最後はこの巻であつたと考えてよい。繰り返すが、この巻は紫の上への鎮魂歌であり、さらに言えば光源氏の辞世の歌であり、光源氏自身に対する鎮魂の巻でもあつたと言ふことができよう。

「幻」巻の終末近く（六―五四七）、光源氏は

死^しで 死出の山越えにし人をしたふとて跡を見つつもなほまじこふかな

と文字通り「迷い」の歌を詠む。それに先立つて（六―五四六）、光源氏は、世を捨てる時期が近づいていることを実感し、万感胸に迫る。原文には「あはれなること尽きせず」とある。先の「死出の山」の歌の直前には亡き紫の上の筆跡を見て、「涙を流している。そのあたりの行文を追つてみれば瞭然とするように一年の終りにあたり、また出家を覚悟した年の暮であるということもあつて、さまざまな人との別れを思つて胸を痛めている。巻の閉じめに――つまり光源氏登場の最後に

もの思ふと過ぐる月日も知らぬ間に年もわが世も今日や尽きぬる

という歌を光源氏は詠む（六―五五〇）。年の終り、また我が身の憂き世での終りにあたつて光源氏は、もの思ひの尽きることのなかつた半生を反芻している。もとより悟りの生活など望むべくもない。迷妄のほかに人の世などあるべくもない。紫の上の手紙は破り棄てたが、この世にあるかぎり、その思い出が消えるわけもない。そういう思ひのままに年も尽き、またわが身も果てまできたのだ、という思いである。

「幻」巻の閉じめの思いは、「御法」巻の巻頭と響きあつて、迷妄の中に生きざるを得ない人間の常態を語っている。その少し前、御^お仏^{ぶつ}名^なという年末の仏事が記され、そこに高僧たちがやつて来ていて、光源氏の長寿を祈願している。

「行く末ながきことを請ひ願ふも、仏の聞きたまはんことかたはらいたし」――（導師が）光源氏の御長寿をと祈願するにつけても、きまりのわるいことだ、というのである。光源氏の終末に立ち会つている高僧はまた光源氏の

内実を察し得ず、気楽な歌を詠んだりしている。

「もの思ふと」の歌の直前、光源氏は可愛いがつている孫の若宮（匂宮）が、年末の行事である追儺（ひな）（大晦日の夜に行われる、悪鬼を追い払う行事）に加わって、声をたてて、走りまわっているのを見て、今後、この子に会うことのできないのが堪え難い、と思っている。紫の上も、亡くなる年の春（「御法」巻 四―五〇二）、気分少しよろしいとき、匂宮を自分の前に坐らせて「自分がいなくなったら、思い出してくれるかしら」と語りかけ、さらに対の屋の前にある紅梅と桜を眺め遣って、「大人になったら、ここにお住みになって、花の咲く折々にはこの花を忘れずに楽しんでくださいね。そんなときには、仏さまにもお供えしてくださいね」と言葉を継ぐ。匂宮は紫の上の言葉にうなずながらも、何かを感じて涙をこらえている。

紫の上と光源氏の兩人がともにこの幼な児に心を引かれ、心を残している。「ものあはれ」の情感は、こういう無心の子供に対したときにも否応なく表れ出ている。作者の筆が、この世との別れに臨んだ兩人の心のありようを描くにあたって、いかにも人間的な感懐を記しおかざるを得なかった、ということは、作者の心の向いている方向を自ずと示している。「御法」巻の二人の心のありようは、こういう幼な児を思うことでも響きあっているであろう。

「御法」巻の巻頭の光源氏の心と紫の上の心との絡みあい、響きあいにまずは焦点を当て、二つの心が「出家」への思いを押し遣ることを見た。愛執の思いは、愛執それ自体の中で、慰藉を求め、浄化を求めて、自己救済を探っているように感じられた。

しかし、次に言及した六条御息所の場合には愛執の思いは慰藉されることも浄化されることもなく、みずからのうちに罪業意識を深めているように見えた。この暗い心は神々に向きあうことによつて救われていくようには見えず、そのために六年余の伊勢の齋宮の杜の中での生活は御息所の心を明るく方角に誘うようにはならなかった。一方、

仏教に向きあうことはこの暗く凝固した心を融解に向わせることのようにも思われたが、しかし、その証はこの物語の中には見えていない。御息所は出家をしたが、死後、成仏し得ぬまま死霊となって顕れた。こうしてみると、執の心の解消は、「ものあはれ」を表立てた光源氏や紫の上の生き方の中にかえって生じているのかも思われた。少くともそこには平安朝の女流文学世界特有の、心の慰藉や浄化に関わる、きわめて美的な自己救済の、宗教的にも言つていい手法が表れているようにも見えた。

最後に、紫の上の死後の、そうして光源氏登場最後の「幻」巻に触れて、そこに自己救済に関わる、きわめて美的な手法が表れていることを述べ、さらにそのありようが「御法」巻の「ものあはれ」的な表現世界とも深く響きあうものではないかということを書いた。『源氏物語』の表現世界は仏教思想や經典や仏教行事に関連する記事も多くもち、仏教の影響を深く受けている世界ではあるが、内実においては、まさに女流文学的な表現世界の特質をもっている作品ではないかと思う。粗々とした形ではあるが、そういったことに触れながら小稿を記した。

以下、補足的な事柄になるが、小稿の中で六条御息所に言及したとき、京の都の賀茂の齋院としてお仕えし、退下されたあと落飾され、尼となった第六十三代冷泉天皇の皇女である尊子内親王や、第六十二代村上天皇の皇女で同様の境遇を辿られた選子内親王のことが、神道と仏道との二つの信仰の世界を生きられた御方として思い浮んだが、紙幅の関係もあつて今回は触れることをしなかつた。とりわけ選子内親王は、尊子内親王が母の薨去によって退下されたあと、円融天皇以下、あわせて五朝にわたり、六十年近くも齋院としてお仕えになられた方である。神に奉仕された方であるのに四十九歳の折には『発心和歌集』という、まさに釈教歌集と言つていいものを編まれた。六十八歳の折に病により退下されたあと、ほどなくして落飾し、尼になられた。源経頼の『左経記』の記述（長元四年九月二十日）によると「年来本意（ほんねい）」、つまり昔からの願いであつたという。神道と仏道とはどう関わっていたのか、

女流文学の世界、とりわけ『源氏物語』の表現世界における、神道と仏道の関わりについて考える上で、いろいろと参考になるものがあると思いが、それらに言及することは小稿ではしなかった。永平寺から毎月出ている月刊詩「傘松」に「平安女流文学と仏教」と題して十八回（平成十七年一月号より平成十八年六月号まで）にわたって、女流文学の表現世界における仏教の意義を問い尋ね、選子内親王についても三回（八）、（九）、（十）、の三回ほど論及した。研究者を対象とした雑誌ではなく、また論述も簡略をむねとして、資料なども省くことの多いものであったので、いずれまたあらためて選子内親王については、女流文学者と仏教の関わりということ論じてみたいと考えている。